国際社会学部

歴史学（感情史）

History of Emotions

なぜ「感情」なのか？

コロナ禍の危機的状況のなか、多くの国民の反対を押し切って開催された東京オリンピック。そのとき本学のすぐ近くで掲げられたのが右上の横断幕でした。「United by Emotion」という言葉に、当時途方もない違和感を覚えました。英語表現としても奇異な感じがしますが、それ以上に「感情」という得体の知れない何かを引っ張り出さないと国民の支持すらおぼつかないという、開催者側の危機意識を感じました。

　この事例にはっきり現れているように、感情はしばしば政治的に利用されます。政治宣伝（プロパガンダ）のように露骨な政治的主張をするのではなく、「〇〇のように感じるべきだ」「そう感じない人間は好ましくない」という、いわば「搦め手」から人びとを特定の方向に誘導しようとするのです。それは現在だけでなく、過去もそうだったのかもしれない。そうした問題意識から、感情が人間と社会において果たしてきた役割を歴史的な視点から研究するのが、「感情史」という研究領域です。

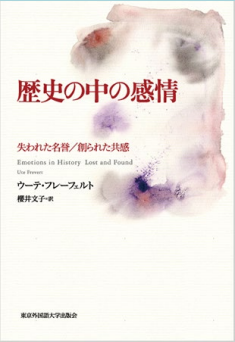
外大の感情史研究

感情史が明らかにしたいことは、大きく言えば二つあります。一つは、感情の規範と実践の関係について明らかにすることです。多くの社会や集団には、どのような感情が好ましいか／好ましくないか、感情表現はどのように行うべきかという（多くの場合は暗黙の）規範があります。たとえば、「怒り」は男性的な強い感情であり女性に相応しくないという感情規範は、長い間社会に大きな影響を及ぼしてきました。しかし、19世紀末以降女性が社会に進出し、新たな挑戦や自由を入れるようになって、こうした規範は徐々に変化していきます。こうした感情規範の網の目の中で、人びとはどのように感情を表現し、あるいは抑制していたのでしょうか。

　もう一つの課題は、感情の「変化」を明らかにすることです。喜び、恐怖、悲しみ、怒りといった感情は人類に普遍的なものであり、地域も時代も関係ない永遠不朽のものだという考え方はいまだに根強いものがあります。しかし、「名誉」のように徐々に衰えていく感情もあれば、人権概念と結びついた「共感」のように新たに生まれてきた感情もあることを、感情史研究は明らかにしつつあります。そう考えれば、感情はけっして心理学や脳神経学の専有物ではないこと、歴史学など多くの人文学が取り組むに値するテーマであることが理解できるのではないでしょうか。

関連する授業一覧　（2023年度）

- **小野寺拓也 「感情史とは何か」**
- **小田原琳 「ジェンダー史概論」**
- **芹生尚子**
  「近世フランスにおける民衆の経験を考える」



ゼミ

- **小野寺拓也ゼミ（中央ヨーロッパ）**
- **伊東剛史ゼミ（北西ヨーロッパ）**
- **小田原琳ゼミ（西南ヨーロッパ）**
- **芹生尚子ゼミ（西南ヨーロッパ）**

関連する学問分野

- **社会史**
- **ジェンダー史**
- **美術史**
- **歴史認識論**
- **人類学**
- **心理学**

おススメの本

- 『感情史の始まり』（ヤン・プランパー）
- 『歴史の中の感情　失われた名誉／創られた共感』（ウーテ・フレーフェルト）
- 『痛みと感情のイギリス史』（伊東剛史／後藤はる美編）
- 『感情史とは何か』（バーバラ・H・ローゼンワイン／リッカルド・クリスティアーニ）